ウィトゲンシュタインの転回に関する一考察

——数学の哲学の視点から

A Consideration on 'Wittgenstein's Turn': From the Point of View of his Philosophy of Mathematics

入江俊夫

IRIE Toshio

要旨 ウィトゲンシュタインの数学の哲学から彼の哲学全般の展開を眺めたとき、「有意味ないしは理解可能性の拡張に関する哲学的考察」と呼びうる研究が鼓舞される。その実現のためには、後期ウィトゲンシュタイン哲学の方法を鮮明に特徴付ける反理論構築的側面と対峙せねばならない。そのため本稿では、彼の前期哲学から後期哲学への転回について、Kuusela, O. による啓発的な解釈を検討しつつ考察し、後期ウィトゲンシュタインの反理論構築的側面を、ある独特な意味での「形而上学」からの脱却として明らかにする。また同時に、Kuuselaの解釈がウィトゲンシュタインの数学の哲学に対しても重要な光を投げかけるものであることを、その問題点とともに指摘し、ウィトゲンシュタインの転回の全貌を明らかにするために、転回に至る思考の推移を、彼の数学の哲学と言語哲学との関係に留意しつつ跡づけることの有用性を示唆する。

0. 概念形成の哲学とその課題 —本稿の背景—

後期のウィトゲンシュタインは数学の証明に対して、概念を形成ないしは変容させるものという驚くべき特徴づけを与えた。「われわれはこういいたい。証明はわれわれの言語の文法を変え、われわれの概念を変える。証明は新しい連関をつくり、これら連関の概念をつくる。(証明は、そうした連関が存在していることを確立するのではない。そうした連関は、証明がつくる以前は、存在しないのだ。)¹⁾」

素朴に考えれば、数学的命題Pを証明することはPが真であることに確証を与えることである。それはちょうど、犯罪捜査において、「犯行時間にAさんはKという喫茶店にいた」ということが真であることを確証することと同じであるように見える。すなわち、何の正しさを確立すべきか、ということは事前に与えられていて、我々は証明によってまさにそのことの正しさを確立するのである。だが、ウィトゲンシュタインによれば、数学における証明は、上の犯罪捜査における経験的な検証とは全く違った種類の事柄である。例えば、彼は、(いまは証明されたが)フェルマーの命題についてこんなふうにする。「私は似た命題の真理の規準ならばもちろん知っているのだが、この命題の真理の規準は知らないのである²⁾。」さらに中期では、「…フェルマーの命題は、基数全体を通して等式の解を探すことが可能でない限り、何の意義もない³⁾。」

このことは非常に問題である。仮に証明すべき命題が真であることの規準が事前に知られていないとしたら、なぜ、証明がその命題の証明に成功していると言えるのか。また、

¹⁾ BGM Teil III-§31.

²⁾ BGM Teil VI-§13.

³⁾ PB § 150.

証明すべき命題中の概念が証明によって変えられるとしたら、それでもその証明はその命題の証明といえるのか？この問いは重要かつ大変面白い難問であるが、本稿で扱う問題ではない⁴⁾。本稿で問題としたいのは、以上の数学の哲学上の見解をもつ言語哲学的含意に関してである。

筆者は学位論文「概念形成の哲学のために—ウィトゲンシュタインの数学の哲学—」で、彼の数学の哲学という切り口から彼の哲学全般の展開を眺めたときの最も啓発的な射程を、合理性、理解可能性に関して、計画性や目的-手段連関において示されるものとは異なった合理性の観念を志向するものであること、あるいは、有意味性を規制する概念的秩序に基づく実在の生成という問題に対して、新たな視点を提供するものである、と見積もった。『日記』の1915年6月1日付の草稿において、ウィトゲンシュタインは次のように記している。

私の書くものはすべて、一つの大問題を巡って書かれているが、その大問題とは、世界にア・プリオリな秩序が存在するか、また存在するとすればその秩序はどの点に存するのか、という問題である⁵⁾。

私見では、彼にとって論理学や数学で体现されているのは、「アプリオリな秩序」であった。『論考』においてウィトゲンシュタインはアプリオリに知られうる秩序の源泉を「言語」に求めたといえるが、後期に至る数学の哲学の展開が『論考』の言語観の動的展開と呼べるものだとするれば、アプリオリな秩序は永遠不変のものではなく、時間とともに生成するものだということになる。この推測はあながち性急な一般化ではない。ウィトゲンシュタインも出席した1928年の講演「数学・科学・言語」でブラウアーは、数学を、自然を秩序づけるものと述べているが、彼の言う‘mathematische Betrachtung’や‘mathematische Abstraktion’は狭義の「数学」を超えた非常に広範な意味で用いられているのである⁶⁾。実際、こうした現象は数学以外にも広く見受けられる。例えば、イギリス的な慣習法という考え方や、音楽史において従来とは異なった様式が起こること、人権概念の拡大など、様々な現象が考えられるであろう。これらは、もちろん、全く違った種類の現象であるが、それぞれ有意味性の拡張、ないしは、理解可能性の拡張が起こっているという点で共通している。本稿の方向性が正しいとすればウィトゲンシュタインの数学の哲学は（数学的）言語の拡張に関する哲学的考察と特徴付けられるが、この考察に『探求』の洞察を加えて拡張し、有意味性の拡張と呼べる様々な現象の、論理的要素、意味論的要素、また、その時間性などを、哲学的に分析・考察するならば、非常に興味深い広大で肥沃な研究領域に発展していくことが予想されるのである。

その実現のためには解決されるべき抜本的な問題がある。いま述べた研究は「有意味性ないしは理解可能性の拡張に関する哲学的考察」と呼ぶことができるが、この研究の成果は何らかの理論であってよいのだろうか？というのも、この呼び名の「哲学的」という要素を後期ウィトゲンシュタイン哲学のある種の継承と考えたとき、彼が理論構築に激し

⁴⁾ この問題については、(入江 2012) で主題的に考察されている。

⁵⁾ NB p.55.

⁶⁾ Brouwer 1928, pp.417-8.

く反対していたという事実をどう扱うか、という問題を避けて通ることができないからである。そして、彼の哲学の静寂主義的側面は彼の哲学の方法と密接に関係している。

この問題に関して比較的最近、大変啓発的な解釈が (Kuusela 2008) において提示された。この書はウィトゲンシュタイン哲学の発展を理論構築とは違った哲学のあり方の徹底化として捉え、詳細な草稿研究に基づきこの点について集中的に扱っている。とりわけ、ウィトゲンシュタイン哲学の転回を扱った第3章では、後期の新しい方法が鮮明に特徴付けられている。

本稿では、来るべき「有意味性ないしは理解可能性の拡張に関する哲学的考察」のため彼の哲学の方法を掴むべく、Kuuselaの解釈を検討しつつ「ウィトゲンシュタインの転回」について考察する。まず、「転回」に纏わるある問題点を指摘し、それに対する応答としてKuuselaの鑄造した「形而上学的投影」という概念が有効であることを指摘する(第1節)。次いで、彼の解釈を参照しつつ、ウィトゲンシュタインの転回の内実を迫る(第2節)。以上の考察を受け、彼の解釈の問題点、というよりむしろ、ウィトゲンシュタイン哲学の転回を解釈することの難しさを述べ、それに対してウィトゲンシュタインの数学の哲学と言語哲学の関係を明らかにすることが有効であることを指摘する(第3節)。最後に本稿における考察の結果を纏める(第4節)。

1. 「語り／示し」の区別と形而上学的投影

一口に「ウィトゲンシュタインの転回」と言っても、論者の着眼点により様々な特徴が浮かび上がってくるであろう。ことによると、転回などなかった、と言うことすら可能である。本稿が「ウィトゲンシュタインの転回」として考えているのは、有名な『探求』第108節で提示されている意味での転回(転換)である。

我々が「命題」「言語」などと呼んでいるものが、私の思い描いていた形式上の統一体ではなく、多かれ少なかれ互いに類似している諸形象の家族であることを、我々は認識する。——だが、そのとき論理(学) (“Logik”) はどうなるのか？その厳密さがそこではばらばらになってしまうように見える。——しかし、そのことによって論理(学)がその厳密さを失うことがありえようか。もちろん、人がその厳密さをいくばくか割り引くことによってではない。——水晶のような純粋さという先入見は、我々が自分たちの全考察を転換することによってのみ、取り除くことができるのである。(考察は転換されなくてはならないのだが、それはわれわれ本来の必要を軸点としてなされなくてはならない、ということができよう。)

「水晶のような純粋さという先入見は、我々が自分たちの全考察を転換することによってのみ、取り除くことができる」。ここでは何が言われているのだろうか。この問いは、第3節で改めて問われることになる。この所見は1930代後半に成立したものであり、ウィトゲンシュタインは、すでにこの時期には、我々の自然誌や民族学的考察を多用するという意味でも後期哲学の思想圏に入っている。にもかかわらず、正しくもKuuselaは、ここで提示されている「転回」の中核的なアイデアは、後に見るMS111中の所見が記された1931年に遡ることができ、ウィトゲンシュタインの転回をこれらの間に連続的に起こった

一つのものとして捉えている。以下、本節と次節で彼の解釈を検討していくが、その前に、問題の所在をはっきりさせるため、筆者の立場に纏わる「ウィトゲンシュタインの転回」を解釈する上での問題について触れておきたい。

ウィトゲンシュタインの転回を論じる際に、『論考』をどのように解釈するかということが極めて大きく影響することは論を待たない。「転回」とは常に「何から何への転回」という形式をとるため、「転回」の把握にとって、転回もとの『論考』に代表される前期哲学と転回先の『探究』を含む後期哲学の把握が不可分だからである⁷⁾。その『論考』の解釈について、(McGinn, 2010) では、言語と世界の関係に着目し、アプローチの仕方を主として2つ⁸⁾に大別している。一方は、「形而上学的アプローチ」であり、単純化して言えば、世界が言語に先行する、ということを経軸に据えて『論考』を解釈するアプローチである⁹⁾。他方は、「反形而上学的アプローチ」であり、先ほどとは逆に、言語が世界に先行する点を機軸に据えて『論考』を解釈する。筆者は後者を支持するものであるが、問題は、後者が前期から後期への転回をどう考えるか、ということである。例えば、前者に分類されているHackerは、転回を「形而上学から概念的探究へ」と容易に特徴付けることができるが、後者は単純にそのように言うことはできない。というのも、後者はまさしく、すでに『論考』が優れて「言語哲学的」であることを力説することにその主眼があるからである。つまり、『論考』で提示されているのはある意味ですでにして概念的探求にほかならないのである。もちろんこのことは、「形而上学」や「概念的探求」という用語にどのような意味を込めるかに依る。片や私見では、ウィトゲンシュタイン自身は多くの場合『論考』から、この用語をある明確な意味で用いていた。それは、言語において示されるものを語ることのできるものであるかのように取り扱うことである。つまり、言語の問題をそれによって表現される事実の問題であるかのように扱ってしまうことである。この規定はよく知られた「語り／示し」の区別による形而上学の捉え直しとすることができ、まさしく彼の哲学の独創の一部を成している。その具体例は『論考』1番台の存在論的所見を見てみればよい。例えば、「事態の構成要素でありうるものが、ものにとって本質的である」¹⁰⁾。これは明らかに3.3の「命題という連関の中でのみ名は意味を持つ」(文脈原理)という言語哲学的所見の反映となっている¹¹⁾。もちろん以上は、本稿が「反形而上学的アプローチ」を採っているということを僅かな傍証とともに表明したにすぎない。

ここで取り上げたいのは、Kuuselaは「ウィトゲンシュタインの転回」を「形而上学から概念的探究へ」と特徴づけるのだが、注目すべきは、この特徴づけが上述の「反形而上学的アプローチ」を採る論者も利用可能になっている点である。つまり、彼が抽出する「形

⁷⁾ 「転回が一回だけとすれば」という但し書きが必要であるかもしれない。

⁸⁾ 正確には、「2つないしは3つ」であるが、以下の論述との関係では、“New Wittgenstein” 学派の“resolute readings” も一種の反形而上学的アプローチと見なして差し支えない。

⁹⁾ 命題が可能的事態の像であることは、対象の事象様相として、存在論的に説明される。Cf. McGinn 2010, p.497.

¹⁰⁾ TLP 2.011.

¹¹⁾ 1番台をこのように「アイロニカルに」読むことは私には自明であると考えられるが、1番台を「真面目に」受け取る傾向はいまだに根強い。この点に関して、Kremer 1997に秀逸な議論が提示されている。(1番台をアイロニカルに読むことは、当該論文の結論部で述べられている。)

形而上学」の観念が非常に啓発的なものとなっているのだ。彼は、後期ウィトゲンシュタインも前期同様、形而上学に纏わる問題は、哲学的探求の性格に対して明晰さを欠くことに由来すると考えていた点を指摘し、草稿から啓発的な一節を引く。

哲学的探求、それは概念的探求である。形而上学について本質的なこと、それは事実的探究と概念的探求の区別が明らかではないことである。形而上学的問いは、問題となっているのは概念的な問いであるにもかかわらず、常に事実的な問いの見かけをとる¹²⁾。

だが、これは先述した言語上の問題と事実問題とを混同する点を言っているだけのように見える。何故、Kuuselaの解釈が、ウィトゲンシュタインの転回を理解しようとする際、「反形而上学的アプローチ」を採る者も利用可能といえるのであろうか？

鍵概念は、Kuuselaが多用する「形而上学的投影」にある。彼は、この概念を『断片』の一節、すなわち、

ある表現形式への帰依の告白は、それが（記号にではなく）対象にかかわる命題を装って述べられたとするならば、「ア・プリアリ」であるに違いない。というのも、その反対は、我々が締め出した思考様式や表現形式に対応する限り、現実には思考不可能であるから¹³⁾。

を参照し、説明している。この一節は言語的コミットメントを表現する言明が対象についての命題を装っている点を指摘している。ア・プリアリな命題によって例示されるように、言語使用の仕方に特徴的な必然性が、実在に投影されて、あたかも実在の持つ必然的な特徴であるかのように見えるのである。これが「形而上学的投影」であり、形而上学的混乱の要約ともいえる。

重要なのは、この「形而上学的投影」という概念の持つ、狭義の言語に止まらない拡張可能性である。Kuuselaの解釈が、『論考』に対する反形而上学的アプローチを採る者に非常に示唆的であるのもこの点にある。彼は次のように説明している。

：確かに概念的探求への移行は、単に実在の代わりに言語を探求するということでありえない。ウィトゲンシュタインの形而上学と概念的探求との間の区別は哲学的探求の適切な対象についての主張に基づいているわけではない。『論考』も言語をその探求の対象として考えていたのだが、このことは『論考』を形而上学から分離するのに十分ではないのである。むしろ、探求の対象として、言語は他の実在と同次元にあるのであり、他のあらゆるものと同様に形而上学的投影の標的となる。このことは、『論考』が、後期ウィトゲンシュタインにおいて、形而上学的混乱の第一の例となっていることに明白である¹⁴⁾。

この広義の形而上学的投影を、Kuuselaは、様々な啓発的な例に即して丁寧に説明して

¹²⁾ MS 134,153. (草稿への参照はウリクトによる番号付けに従う。) BPPi § 949.

¹³⁾ Z § 442. この引用を含む彼の説明は、Kuusela 2008 p.104にある。以下、ページ数のみの提示の場合はずべて、この研究書を指すものとする。

¹⁴⁾ p.104

いる。ここでは単純化し、次のように纏める¹⁵⁾。：形而上学的投影は、ある場合には、原型の特徴を探求の対象に付与してしまうことであると記述することができる。ここで、原型とは、他の諸ケースがそれに基づいて形どられる (modeled)、範例ないしは模範であり、その力能において、それら他の諸ケースを把握する仕方、それらを提示する様式のための基盤を形成する¹⁶⁾。形而上学的「発見」は、こうした原型の地位に関する混乱に淵源している。形而上学的投影の結果、原型は、探求の対象が合致せねばならない何ものか、挙句、対象の本質として主張されてしまうのである。

以上、「形而上学的投影」という概念とその有効性について考察した。Kuuselaの最も啓発的な点は、語り／示しの区別を狭義の言語（ないしは、対象としての言語）から解き放ち、形而上学的投影として、探求の形式、ものの見方一般（次節では「眼差し」）にまで拡大することを指摘した点にあるといえるだろう。

次節では、この概念を通じて、ウィトゲンシュタインの転回の内実を考察する。

2. ウィトゲンシュタインの転回

ウィトゲンシュタインは自身のかつての目標、命題の最終的分析という課題ないしは理想について、次のように記している。

このことは、言語、命題、思考の本質を問うことのうちに表明されている。というのも、我々が探究において言語の本質—その働きや構造—を理解しようと努力しても、それはこの問いの目指しているものではないからである。つまり、こうした問いは、本質なるものにおいて、すでに公然と明るみに露呈しているものや整理することによって一目瞭然となるものを見て取ってとらずに、何か表面の背後に横たわっているものを見ているからである。それは、内部にあるもの、事柄を見通したときに見るもの、そして分析によって掘り出されるべきものだ、というのである。

「本質は我々に隠されている」。これが我々の問いがいま仮定している形式である。我々は「言語とは何か」、「命題とは何か」と問う。そして、これらの問いに対する答えは、一度に、いかなる将来の経験とも無関係に与えるべきものだ、というのである¹⁷⁾。

ここには、要素命題の存在を想定してすべての命題が共有する一般的形式を与えることにより命題の本質を提示し、有意味性の限界を一挙に画定し、問題は原理的に解決された、具体的な個々の命題の分析は自分が与えた枠組みの中で将来明らかになるであろう、という『論考』で表明されている眼差しの克明な描写がある。ここでは、引用所見中の「我々の問いのいま仮定している形式である」という表現も示すように、Kuuselaの言う「形而上学的投影」が問題となっている。「本質は我々に隠されている」、これが問題となっている形而上学的投影（の一部）である。

では、ウィトゲンシュタインは自身の形而上学的投影からどのように脱却したのだろうか

¹⁵⁾ 本稿で手短かに述べる概要は、ともすると彼の繊細な記述を損ないかねないので、是非直接、原論文 (pp.104-111, pp.121-7) に当たって頂きたい。

¹⁶⁾ p.122

¹⁷⁾ PU § 92.

か？つまり、彼の転回の内実とは何だろうか？重要なのは、Kuuselaの指摘するところであるが、ピクチャー¹⁸⁾としての命題という『論考』的把握自体がミスリーディングであるわけではない、という点である。その把握がミスリーディングになるのは、他の先入見や不適切な比較と協同し哲学的理論が構築され、ピクチャーとしての命題という把握が、すべての命題が合致しなくてはならない何ものか、(命題に関する真理) という形態をとったときである、このとき我々の探求対象である命題は「ミスリーディングなアスペクト」を帯びてしまっている¹⁹⁾。

ここで、「ミスリーディングなアスペクト」を帯びることを“像”と連関付けることが、理解の助けになるだろう。Kuuselaは第1章で“像 (picture)”について踏み込んだ考察を行っている²⁰⁾。これを纏めれば次のようになる。“像”とは、物事や事実の描出様式の把握といえる。それは細部に渡って注意深く分節化されているわけではないし、事柄に密着した吟味に基づくわけでもない。それは自然で素朴な把握であり、しばしば偏狭で不適切な比較に基づき我々を誤導する。私見では次のように例示されよう。ウィトゲンシュタインは「意味」という観念を徹底的に考察したが、それは、この観念を自覚する際、様々な“像”が我々を誤導するからである。いま、語の意味とはそれが指示する対象である、という言語哲学上のテーゼについて考えよう。これは、固有名を範例とする“像”に由来し、事例によっては正しい。だが、一般的な言語理論として主張しようとする途端に困難にぶつかる。数の意味はどう扱えばよいだろうか？また、否定の意味は？ここで、語の意味とは指示対象である、という最初の理論が阻却され、代わりに、語の意味とはその影、すなわち心的イメージである、という理論に取って代わられるかもしれない。あるいは、心的イメージは、「意味」という観念を探求しようとするとき真っ先に思いつく“像”であるかもしれない。とりわけ、後者の“像”は厳密な思考を志す人を、「意味」や「意識」という用語自体から遠ざけた。ここでKuuselaの啓発的な表現を引くとしよう。「哲学的問題の困難は探求する対象の神秘性によるのではない。そうではなく、探求者の誤解のため、探求対象を特定の光のもとで見るとようにさせられ、哲学的困難が生み出されるのだ。」(p.41) ミスリーディングなアスペクトが生み出されるとはこうしたことである。我々が抵抗すべきは、形而上学の源泉である、「特定の光」ないしはそのもとで見られたときの「ミスリーディングなアスペクト」である。

Kuuselaは次のように言う²¹⁾。「例のポイントは、かなり同語反復的であるが、何かを例示することである。例はより一般に、すなわち、他のケースにも適用されることを主張する (make a point) ために用いられる」。ここで問題となっている「例」は、それ自体だけでなく、その背後に控える (あるいはそれにおいて示される) 一般的な把握・見方 (ないしは、啓発的に比較によってもたらされる光) と不可分であるもの、ほとんど「範例」と言ってよいようなものであると考えられる。「例によって明るみにもたらされたものは一般的に多くのケースにも適用されるかもしれないが、問題は、その適用可能性が実際にそ

¹⁸⁾ 本稿では、「ピクチャー」という語を『論考』のいわゆる「写像理論」を念頭に置き用いている。それに対して「像」という語は、『論考』以降の展開で多用された (ともすると人を誤解へと導く) “Bild” を念頭においている。両者は “paradigm” という点において共通していることを私はKuuselaに学んだ。

¹⁹⁾ p.123.

²⁰⁾ p.36-42.

²¹⁾ p.124.

うであるよりも過大に主張されるときに、とりわけ、例が、それが関わっているケースに関して必然的に真である何ごとかを示していると主張されるときに生じる」。

ここで、Kuusela同様、我々も命題と絵画（ピクチャー）との比較について考えてみよう。仮に問題となっている状況が論理学の命題を特徴づけることであるとしたら、絵画との比較は、可能的事態の像となっている通常の命題との対比で、（トートロジーであるがゆえに）何の像でもない命題として論理学の命題の特徴づけを助けているといえる。だが、議論の本位を離れて、命題とは事実の論理像である、という一節が真なる命題として扱われた場合、最初は啓発的であった例から範例としての地位が覆い隠される。我々はテーゼを主張しているのであり、形而上学的理論を構築しつつある。物差しの1cmを指して、「これが1cmである」と（概念規定の意味でなく）言うようなものである。

したがって、（啓発的な）例は、哲学的理論の根拠として用いるのではなく、比較の対象として把握すべきである。我々はここにKuuselaの指摘する「ウィトゲンシュタインの転回」の核心を見る。Kuuselaが効果的に引いている1931年という大変早い時期に記された手稿（第1節で述べたMS111）からのシュペングラーに関する一節を我々も見よう。

比較の対象、こうした考察方法を引き出させた対象は、先入見が議論に忍び込んでしまわないよう、明示されなければならない。なぜなら、そうなった場合、我々は否応なしに、比較の対象に対して当てはまることをすべて考察対象に関して主張してしまうから。挙句、我々は、それは常に…でなければならない、と主張する。

さて、このことが起こるのは、我々が原型の特徴に考察における足場を与えたいがためだ。だが、そこで、原型と対象とを混同することから、我々は独断的に原型だけが必然的に持っている特徴を対象に付与してしまう。他方で、我々が与えたい一般性が実際に成り立つのはあるケースに関してのみという場合に、考察は一般性を欠くと我々は思ってしまう。だが、原型はそれ自体として、すなわち、考察全体を特徴づけ、その形式を決定するものとして据えられねばならないのだ。このようにして、原型は先んじて立ち、考察されるすべての対象に対して真であるという主張によってではなく、考察の形式を決定するものであるがゆえに、一般に妥当するのである²²⁾。

例は、比較を通じて、探求の対象を特徴付けるために用いられるのであり、それ自身とそれに基づいて形どられる諸事例との間の類似と相違の両方に注意を向けさせる。すなわち、例は、探求の対象のある特徴に注意を促すために用いられ、例と探求の対象がどの程度合致しているかは、探求の際に開かれたままである。だが、このことはさらなる注意が必要である。モデル（範例）は、ある概念のもとに包摂されるあらゆる対象がそのようにならなければならないものというふうに、何らかのテーゼの根拠として用いられてはならないのだが、他方で、そのことにより事柄が、その概念のもとに包摂される若干の対象に対してなら成り立つというふうに、経験的一般化の問題となるわけでもない。モデルは、ものを把握する仕方・探究の対象を描出する様式を分節化したものなのである。分節化は、事柄に密着し、細部にわたって注意深くなされた吟味に基づくべきである。例えば「語の

²²⁾ pp.123-4. MS111, 119-120.

意味』に関して、自然で素朴な把握である心的イメージという像に対抗して提出された使用というモデルのように。

以上、(少々荒削りであるが)Kuuselaの解釈を参照し、ウィトゲンシュタインの転回のコア部について纏めた。

3. ウィトゲンシュタインの転回と数学の哲学

これまでの考察の結果、第1節で『探求』第108節について問われた「水晶のような純粋さという先入見は、我々が自分たちの全考察を転換することによってのみ、取り除くことができる」の意味についての問いにどのように答えたらよいただろうか。

Kuuselaは、第108節で問題とされている論理(学)の厳密さに関する「バーゲン」について、割引きが問題となっている「論理(学)」(“Logik”)とは、「言語の論理」のことを言っているのか、「学科としての論理学」のことを言っているのか、と問い、後者であると結論する。以下では、前者を「論理」、後者を「論理学」と呼び、考察してみたい。私見では、前者は我々の日々の言語において働いている何ものか、後者は、それに対する反省的学問である。Kuuselaは彼の主張を次のように説得的に論じている。

：バーゲンの状況は、論理学が言語使用についての学説を含むところから生じている。すなわち、論理学は我々の言語使用が厳格な規則にしたがって進んでいると記述したいのだが、我々の言語はその要求を満たせないのである。このような状況そのものは、水晶のような純粋さという論理学の要求(理想)を新しく位置付け直すことによって、変えられなければならない。『論考』は、言語使用は明確かつ正確な規則によって統御されねばならない、と主張していたが、転回によって生じた新しいアプローチでは、こうした規則は探求の対象(言語使用)の特徴と考えられてはならない。それは、提示の形式ないしは様式、論理的探求の形式を特徴付けるものとして、捉え直されねばならないのである。哲学ないしは論理学は、明確かつ正確な規則を、言語使用を記述・明晰化するための比較の対象として用いるのである²³⁾。

最後の部分は、我々が前節で見た、Kuuselaの取り出すウィトゲンシュタインの転回のコアにほかならない。Kuuselaの主張は次のようにも言い換えられるであろう。：問題は探求対象の「言語の論理」ではなく、探求それ自体としての「論理学」の方である。我々の言語使用は、常に明確で正確な規則に従っているわけではない、と言うことは、言語使用に関するあるテーゼを否定している。ウィトゲンシュタインが転回で至ったのは、このような単なるアンチテーゼではない。Kuuselaは次のように表現している。：ある特定の目的のために、言語は厳格な規則に従って使用されていると記述することができる、と言うことは、言語は本当にそうした規則に従って使用されている、と言うことと全く異なるのである²⁴⁾。

Kuuselaの主張には多くの真理が含まれている。確かに「論理」と「論理学」を区別し後者を強調することは重要である。『探求』第108節の「水晶のような純粋さという先入見」は、まさしく後者について言われている。にもかかわらず、同節でその前に出現する“Logik”を後者のみを意味するとは言うとしたら、いささか無理があるといわねばならない。Kuu-

²³⁾ p.136.

²⁴⁾ Ibid.

sela自身、「バーゲンの状況全体」に、言語の論理は関係しないと積極的に言いたい訳ではあるまい。

そもそも、ウィトゲンシュタインはなぜ、前節冒頭で引いた『探求』第92節に示されている「視線の向け方」をしたのだろうか？直ちに思い至るのは次のような事柄である。

『論考』の主要な課題の一つである、有意味性の限界、ないしは、思考可能なものの限界の画定を、『論考』はすべての命題が共有する本質、命題の一般形式を一種の再帰的定義により提示することによって行った。一見すると、すべての命題を限界付けることも、命題が命題である限り共有している単一の形式が存在する、ということも突拍子もないことであるように見える。だが、このことは、ウィトゲンシュタインにとって、命題の理解には、その命題が実際に真であることを（経験的に現実の世界と比較して）知る必要はなく、もしその命題が真であれば、どのような事態が成り立っていないかを知ることだ、という彼の確信（そして、我々にとってもさほど無理のない見解）から、ほとんど自明のこととして要請されたものであった²⁵⁾。というのも、命題の理解が個別的な経験に依らない以上、当然ながらその形式も、アприオリに予め与えられていなければならないからである²⁶⁾。「命題のあらゆる可能な形式が予見可能でなければならない」のである。1616年11月21日付けの『論考』のための草稿から引こう。

命題の一般形式を提示することが可能であるという事実が意味するのは、命題のあらゆる可能な形式が予見可能でなければならない、ということである。

そしてこのことは、以前は予見されなかったことが実際に存在する、と語りうるような命題形式に我々が達することは決してありえない、ということである。

というのも、仮に達するとすれば、このことは、この命題形式を初めて可能にしたあらたな経験を我々がすることであろうからである。

したがって、可能な命題形式はアприオリでなければならないがゆえに、一般的命題形式が提示可能でなければならない。命題の可能な形式はアприオリであるがゆえに、命題の一般形式が存在する²⁷⁾。

そして、命題形式はアприオリに与えられているということはまた、論理学の「知」がアприオリな「知」であるということからも要請されねばならないことなのであった。ウィトゲンシュタインにとって「論理がアприオリである」ということは、そうでないことなどあり得ない、不動の確信であった。

我々の根本原則は、ともかくも論理によって決定されることのできる問いは、いずれも直ちに (ohne weiters) 決定されることができなければならない、ということである。

(そうした問いに世界を注視することによって答えねばならないような状況になった場合、このことは、我々が根本的な見当違いをしていることを示している。)²⁸⁾

²⁵⁾ Cf. TLP 4.064.

²⁶⁾ 無論、これには命題が分節的であるという点も重要である。(cf. TLP 4.024, 4.027, 4.03)

²⁷⁾ NB p.81.

²⁸⁾ TLP 5.551.

以上が、『論考』的枠組みの設定へと導いた「視線の向け方」を構成する主要なものうちの一つである。

さて、今や命題の一般形式が捨て去られた。そうすると、最後の文の対偶から、命題の一般的形式が提示不可能ならば、可能な命題形式はアプリアリとは限らない、ということになるだろうか？もしそうだとすれば、経験によって論理的な事柄が決着されることを意味することになる。現代では、四色問題のコンピューターによる解決など論理的な事柄がアポステリオリに知られると言いたくなる状況は確かに存在する。だが、ウィトゲンシュタインは最晩年に至っても論理的な事柄が経験によって決着すると考えなかったし、その意味で、彼にとって依然として論理学はアプリアリな知であったと考えられる。そこで今、論理学はアプリアリな知であるということに変更はないとしよう。だがそうすると、上述の推論過程のどこか別のところに変更されなければならない。それはどこか？命題の一般形式が提示可能であることは、命題のあらゆる可能な形式が予見可能であるということにほかならないのだから、その提示が不可能であれば、命題の可能な形式が予見不可能でありうる、これはいいだろう。だが、ある命題の可能な形式が予見不可能であれば、その命題形式に関する論理的なものは経験によって知られることになってしまうのだろうか？そのことを経験によらずに知るということはありえないか？論理的なものを経験によらずにアプリアリに知るということは実際に行われている。数学がそうである。中期以降の数学の哲学における集中的な考察は、彼の導かれた方向として、「予見不可能なアプリアリ」というものが考えられることを示すのではないか²⁹⁾？

以上は、さしあたり文献上の裏づけの不十分な解釈上の仮説である。だが、上で見た Kuusela の主張に対して言いたいことは、これらは、学科としての「論理学」というよりむしろ、その対象である「現実の論理」についての洞察であるように考えねばならないのではないか、ということである。もちろん、Kuusela の力説するように、我々の主張も「現実の論理」についてのテーゼであってはならない。「論理」と「論理学」の区別自身が、対象と（探求する）主体との「比較」に基づいており、とりわけ“Logik”の場合はこのような「比較」の有効性が注意深く検討される必要がある。

またさらに、ウィトゲンシュタインが数学の哲学において徹底的に批判したものは何だったのかを考えよう。それは、数学を時空的世界を超えた世界の探求とし、そこにおいて成立している事実を発見するという数学の捉え方、すなわち、いわゆる「数学的プラトニズム」である。彼はそれに対し、数学で行われていることは発明であること、一種の言語的決定であることを繰り返し強調した。これまでの論述で明らかであると思われるが、そこで彼が指摘しているのは典型的な「形而上学的投影」に他ならない。この点は、例え

²⁹⁾ この点に関して、『探求』第23節が啓発的である。

…我々が「記号」「語」「文」と呼んでいるものすべての使い方には、無数の異なった種類がある。しかも、こうした多様さは、固定したものでも、いちどき与えられるものでもなく、新しいタイプの言語、新しい言語ゲームが、いわば、発生し、他のものがすたれ、忘れられていくのである。（この点のおおよその描像を、数学の諸変化が与えてくれよう。）

この所見が、先に引いた『探求』第92節の「我々が「命題」「言語」などと呼んでいるものが、私の思い描いていた形式上の統一体ではなく、多かれ少なかれ互いに類似している諸形象の家族であることを、我々は認識する」と密接に関係することを考えよ。

ば、ウィトゲンシュタインが、

こう言えるだろうか：算術あるいは幾何学の問題は、空間そのものに関係しているにもかかわらず、いつも空間の中にある諸対象に関係しているように見える、あるいは誤ってそう理解されうる、と³⁰⁾。

と記すとき目立って顕れている。

本節のこれまでの考察が指し示しているのは、ウィトゲンシュタインの転回と哲学に復帰以降の数学の哲学への没頭は密接に関係しているという点である。この点について TS213、いわゆる『ビッグタイプスクリプト』の「要素命題」と題された章の次の所見を参照されたい。

ある命題の中に論理積が隠れていることがありうるか。もしありうるのなら、どのように経験されるか。そして命題の中に隠れているものを明るみに出すのに、どんな方法を我々は持っているか。その方法を持っていないのなら、我々は、何かが隠れているとか、隠れているかもしれぬとかいうことについて語ることもできない。そして、探すための方法を我々は持っているなら、論理積が命題の中に隠れているということは、例えば、753 割る 3 の商は割り算がなされる前は隠れている、というようなことでしかありえない。

ある命題の中に論理積が隠されているかどうかというのは、数学的な問題である³¹⁾。

ここで扱われている事柄は、第2節で『探求』第92節（『本質は我々に隠されている』。これが我々の問いがいま仮定している形式である）において見た、『論考』の形而上学的投影に他ならない。本稿では議論できないが、要素命題の発見に関する問いの扱いと第0節で引用した「…フェルマーの命題は、基数全体を通して等式の解を探すことが可能でない限り、何の意義もない」で述べられている、無限領域上を走る変項を含む一般命題により表現された数学の上の問いは意義を欠くとしたこととの間には、厳密な並行関係がある。そして、この並行関係を念頭において見ると示唆的であるのが、まさしく“Über Dogmatismus”と題された、1931年12月9日付のワイスマンの筆記録である。

…より危険なのは別の誤り、それはまた私の本全体を貫いているのだが、後になってはじめて答えが見つかるかのような問いが存在するかのように考えるということである。人は、結果はまだ手にしてないのだが、結果を見つける方法は持っていると考えてしまう。こう考えることから、私は、例えば、要素命題を発見することが論理的分析の課題であると考えた。

…

ここで私が反対する考え方は、現在まだわかっていない何かを見つけることができる、

³⁰⁾ PG S.365.

³¹⁾ PG S.210 (邦訳294-5ページ)、TS213, 100. 強調は引用者による。Cf. PU § 91.

何か全く新しいことを発見できるという考え方である。これは誤りである。真実は、我々はすべてを手にしており、それを実際に目の前にしており、何も待つ必要はない。日常言語の文法という領域で我々は動いており、この文法はすでにそこにある。よって、我々はすべてを手にしており。将来を待つ必要はない³²⁾。

ここで「私の本」とは当然ながら『論考』のことである。また、いまの引用箇所には、「昨年やっと私はこの誤りから解放された」と記されており、筆記録の日付をから、ここで言われている「解放」は1930年のいつかに起こったということがわかる。なお、フェルマー予想の意義の問題に先ほど触れたが、このことには無限概念についての哲学的解明が深く関係しており、後者は1929年夏頃に達成されたと考えられる³³⁾。これらの事実は、ウィトゲンシュタインが後にウリクトとの会話で「『論考』で犯した最大の誤りは、一般命題を単称命題の無限の連言や選言と同一視したことであった³⁴⁾」と言ったことを考えれば、非常に意義深く映る。

我々は、これらの資料をKuuselaに対する反論とは考えない。むしろ、「形而上学的投影」という概念で彼が光を当てた側面を足がかりに、ウィトゲンシュタインの転回の更なる複雑さに迫ろうとするものである。Kuuselaの仕事は、1930年代後半に記された「ウィトゲンシュタインの転回」が1931年に遡ることができることを説得的に示した。したがって、今度は彼の解釈枠組みのもとで、それ以前、すなわち1929年にウィトゲンシュタインが哲学に復帰してから1931年までの彼の思考の歩みを、言語哲学と数学の哲学との関係に着目しつつ明らかにすることが肝要である。

4. 小括

Kuuselaの解釈は、「ウィトゲンシュタインの転回」の内実を“dogmatism”、すなわち、哲学的理論を構築することの誤りに関する徹底化として明るみにもたらしたと同時に、彼の数学の哲学におけるプラトニズム批判の眼目を鮮明にすることにも大きく寄与している。ウィトゲンシュタインの転回の全貌を明らかにすることは大変困難な課題であり、その難しさの急所は論理学的探求の特異性—「論理」と「論理学」を分かつことの問題性—にある。この困難な課題に対し、有効なアプローチとして、Kuuselaの提示した解釈枠組みを押し広げ、ウィトゲンシュタインの哲学復帰直後から1931年までの思考過程を、言語哲学と数学の哲学との関係に着目しつつ跡付けるといふものが存在する。このアプローチはKuuselaの枠組みに対する更なる吟味になることも期待される。

略記と参考文献

- Wittgenstein, L. 1922. *Tractatus Logico-Philosophicus*. Ogden, C. K. (trans.), Routledge. (奥雅博訳。1975. 『論理哲学論考：ウィトゲンシュタイン全集1』。大修館。(以下、全集での邦訳は「全集」と略記し、出版社を省略する)) …【TLP, 『論考』】
- 1984. *Notebooks 1914-1916*, The University of Chicago Press. (奥雅博訳。「ノートブック1914-1916」。上掲全集1所収。) …【NB, 『日記』】
- 1984. *Philosophische Bemerkungen: Werkausgabe Band 2*. Suhrkamp. (奥雅博訳。1987. 『哲

³²⁾ WWK S.182-3 (邦訳261-3ページ)。強調は引用者による。

³³⁾ Cf. Wrigley 1991.

³⁴⁾ Von Wright 1982 p.151。強調は引用者による。

- 学的考察』, 全集 2) …【PB, 『考察』】
- 1984. *Philosophische Grammatik: Werkausgabe Band 4*. Suhrkamp. (山本 信訳. 1975. 『哲学的文法 1』, 全集 3. 坂井秀寿訳. 1976. 『哲学的文法 2』, 全集 4.) …【PG, 『文法』】
- 1984. *Bemerkungen über die Philosophie der Psychologie: Band 7*. Suhrkamp. (佐藤徹郎訳. 1985. 『心理学の哲学 1』, 全集補巻 1.) …【BPP i】
- , P. M. S. Hacker, Joachim Schulte (ed.) 2009. *Philosophical Investigations* (4th ed), Wiley-Blackwell. (藤本隆志訳. 1976. 『哲学探究』, 全集 8.) …【PU, 『探求』】
- 1984. *Bemerkungen über die Grundlagen der Mathematik (3rd ed): Band 6*. Suhrkamp. (この版の初版は同社から 1974 年に出版) (中村秀吉・藤田晋吾訳. 1987. 『数学の基礎』, 全集 7.)
- 1984. *Zettel: Werkausgabe Band 8*. Suhrkamp. (菅 豊彦訳. 1975. 『断片』, 全集 9) …【ZL, 『断片』】
- 1984. *Wittgenstein und der Wiener Kreis: Werkausgabe Band 3*. Suhrkamp. (黒崎 宏訳. 1976. 『ウィットゲンシュタインとウィーン学団』, 全集 5.) …【WWK, 『学団』】
- 2000. *Wittgenstein's Nachlass: The Bergen Electric Edition*. Oxford University Press.
- Brouwer L.E.J. 1928. “Mathematik, Wissenschaft, und Sprache”. Reprinted in Heyting, A., & Freudenthal, H. (ed.) *Brouwer: Collected Works, vol.1*. Amsterdam: North-Holland Publishing Company (1975), pp.417-428.
- 入江俊夫. 2012. 「数学における問題と解決との関係と証明概念—『論理哲学論考』から『数学の基礎』に至るウィットゲンシュタインの数学の哲学の展開の意味—」, 『科学哲学』45 卷 2 号 (日本科学哲学学会), 115-129.
- Kremer, M. 1997. “Contextualism and Holism in the Early Wittgenstein”. *Philosophical Topics* 25 .2, 87-120.
- Kuusela, O. 2008. *The Struggle against Dogmatism: Wittgenstein and the Concept of Philosophy*. Harvard University Press.
- McGinn, M. 2010. “Wittgenstein and Internal Relations”. *European Journal of Philosophy* 18(4), 495-509.
- Wrigley, M. 1995. “Wittgenstein, Ramsey, and the Infinite”. in Hintikka, J. and Puhl, K. (ed.) *The British Tradition in Twentieth Century Philosophy: Proceeding of the 17 the International Wittgenstein Symposium*, pp. 164-70. Vienna Holder-Pichler -Tempusky.